

研究結果報告書

戦後日・韓戦争文学の比較研究
ーフィリピンでのアジア太平洋戦争体験の形象化ー

所属： 韓国外国語大学 日本語大学
役職： 非常勤講師
氏名： 張 智映

本研究の目的は、アジア・太平洋戦争の際、米国と日本の最大の激戦地となったフィリピンを空間的な背景とした戦後日本と韓国の戦争小説を比較、分析することにより、アジア・太平洋戦争の意味を再照明することである。具体的な研究対象は、1940年代初頭フィリピンでの戦闘に参加したという共通の体験を持つ日本の大岡昇平と韓国の李丙求が1945～1960年に発表した戦争小説である。

大岡昇平と李丙求の共通の戦争体験地であり作品の背景になっているのは祖国ではなく他国ーフィリピンである。この点で、両作家のアジア・太平洋戦争小説を比較・分析することにおいて、戦争の直接的な主体ではないけれども、もっとも熾烈な戦場になった「フィリピン」という空間的な背景の持つ意味に注目した。そこで、本研究では、フィリピンでのアジア・太平洋戦争体験という点に注目して、戦後日・韓戦争小説を比較研究した。

まず、作品の中で敗戦兵となった主人公たちによってフィリピンの自然とその原住民がどのように描かれているかを考察してみた。大岡の場合自然描写に、李丙求は人物描写に主人公の心理的な状況が投影される傾向がある。こうした心理的な投影により、主人公たちは集団から脱して、個人としての自分自身を認識する。これは、戦争の主導者または加担者である自国の矛盾及び作品発表当時の社会的現実ー米占領期の日本と理念対立期の韓国ーに対する認識へと繋がり、両作家の作品の中で共通して俘虜収容所での人物の対立を通じて現れている。

次に、戦争における生死に関する認識である。戦場での敵・味方という概念は、政治や国家による区分で、人間対人間の区別ではない。大岡の作品の中の主人公たちは、戦争という極限状況下での人間としての生存を脅かされたり、自分自身がその生存を脅かすことになる他者に向き合った時、かえって生命の美しさに対する驚異ー絶対的な生命の美を見い出す。このような生死に対する認識は、李丙求の作品にも見ら

れるが、このことは大岡と李丙求が戦後発表した作品に見られる生死に対する認識を持つようになった背景である戦争を体験した場所が自国の影響力が弱化した第3国—フィリピンであったことがその根拠として考えられる。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

戦後日・韓の戦争文学の比較研究

(張智映, 韓国日本言語文化学会, 2013.11.19, サイバ韓国外国語大学)

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

戦後日・韓の戦争文学の比較研究

(張智映, 『日本言語文化』, 2014年末予定)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)